

疑問に囚われたものの、自分でそれを判断する力を持たないのである。「自分より上のものの判断に任す外ないと云ふ念」がそれに他ならない。それは「自分より上のもの」を絶対視する発想に基づいている。

そう言えば、鷗外は『最後の一句』(大4)の中でも、少女いちの「お上の事には間違はごさいますまいから」という言葉を通して、お上を絶対視する庶民の姿を描いていた。父親の助命を嘆願する白洲の席で発せられたこの言葉は、無知ゆえの強さを持っており、それだけに役人たちを狼狽させる。

庄兵衛には、いちのような強さはない。しかし、二人はお上の判断を確かなものとして疑わない、という点で共通している。これは二人が新しい疑問に駆られながらも、時代的限界ゆえにまだ十分目覚めきれなかった、ということなのだろうか。

確かに時代的限界はあった。しかし、現代においてこの問題は払拭されているのであろうか。そのような問いかけが語り手から発せられているように思われる。語り手は「自分より上のものの判断に任す外ないと云ふ念」を「オオトリテエに従ふ外ないと云ふ念」という表現に置き換えることによって、これが寛政期固有のものではなく、現代にも通じ得るものであることを暗示しようとしたのではなかったか。

庄兵衛は、「腑に落ちぬものが残つてゐる」のでお奉行様に聞いてみたい、と願う。しかし、たとえ尋ねてみたとしても、お奉行様からは納得のいく答えは得られないだろう。なぜなら、判決がすべてを語っているのであり、それ以上のもが出てくる可能性は皆無に等しいからである。庄兵衛は、いわば堂々巡りを宿命づけられた疑問に囚われたのだ。

作者鷗外は、その官僚生活において、明らかに「オオトリテエ」の側に属していた。庶民の目からは絶対的なものに映じてしまいがちながらも、その本質が空虚でしかないことを直視していたのが鷗外である。「遺言」であれば権威的なものを排除しようとした姿勢と、いちや庄兵衛を通して権威者の判断力を盲信する庶民の姿を描く態度とは、まさに表裏の關係にあったと言えるだろう。臨終の際に鷗外が、「馬鹿馬鹿しい」と呟いた事実を思い合わせると、より一層その感を強くする。

庄兵衛の限界は、喜助をいわば偶像化してしまったところにも見出すことができる。彼が喜助に見出した「毫光」も、あくまで彼の内面で演じられた下

ラマのワンシーンであった。ただ、このドラマは庄兵衛だったからこそ可能であった、と言い直すこともできよう。

庄兵衛は、「なんだかお奉行様に聞いて見たくてならぬ」という願望を抱く。これは彼の中に、お奉行様と「語り手」という願望が芽生えたことを意味する。それまで喜助の話の聴き役に徹していた庄兵衛は、ここで語り手へと内部転換する契機を見出した。受け手としての聴き手から送り手としての語り手へ。ここには明らかにドラマがある。事実、「翁草」に収められた「流人の話」は、流人の話を聞いて、それを誰かに語る「守護の同心」がいなければ、決して存在しえなかったのである。このとき、「守護の同心」は流人の話に何かを感じたのだ。

この作品は、「次第に更けて行く朧夜に沈黙の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべつて行つた。」の一文で締め括られる。「沈黙の人二人」の心の中には、それぞれ語られない言葉がうごめいていることは改めて確認するまでもない。

〔注〕

(1) 「東京朝日新聞」、明40・5・3

(2) はじめ「高瀬舟と寒山拾得」と題し、「心の花」(大5・1)に発表。

その前半部分を「高瀬舟」と合わせ『高瀬舟』(大7・2)に収録。

(3) 田中実「『高瀬舟』私考」(『日本文学』、昭54・4)

(4) 出原隆俊は「『高瀬舟』異説」(『森鷗外研究』8、和泉書院、平11・11)の中で、『高瀬舟』が安楽死をテーマとする作品だった場合、この婆さんの登場はかえってノイズになってしまうとする立場から、むしろ喜助の弟殺害の可能性を読み取っている。そうなると、喜助の晴れやかな表情は、巧みに周囲を欺ききつたがゆえのものとなり、作品の解釈は大きく異なってくることになる。確かに刺激的な論文だが、確証となる根拠が乏しいという感みは残る。あくまでも一つの可能性を示唆した論文と見るべきだろう。

(五)

根拠が必要となる。喜助の右の言葉は、彼が白洲でお上から言明を要請された結果生まれたものと解釈すべきだろう。

剃刀を抜く時の手応は、喜助にとつては些細な事柄でしかない。だが、その際に「今まで切れておなかつた所」を切ったかどうかは、裁く側にとつては重要な判断材料となる。おそらく、お上はそのことを執拗に問い質したに違いないのだ。

一方、剃刀を抜くときの後姿を目撃して、すぐさま逃げて行った婆さんがいた。^④「翁草」の「流人の話」では、この婆さんは存在しない。その点で、これは明らかに作者鷗外の独創である。この婆さんは事態を詳細に眺めたわけではない。しかし、彼女がそれを弟殺しの場面として証言することが、お上にとつては好都合だったのである。

五

庄兵衛は其場の様子を目のあたり見るやうな思ひをして聞いてゐたが、これが果して弟殺しと云ふものだらうか、人殺しと云ふものだらうかと云ふ疑が、話を半分聞いた時から起つて来て、聞いてしまつても、其疑を解くことが出来なかつた。弟は剃刀を抜いてくれたら死なれるだらうから、抜いてくれと云つた。それを抜いて遣つて死なせたのだ。殺したのだとは云はれる。しかし其儘にして置いて、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと云つたのは、苦しさに耐へなかつたからである。喜助は其苦を見てゐるに忍びなかつた。苦から救つて遣らうと思つて命を絶つた。それが罪であらうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救ふためであつたと思ふと、そこに疑が生じて、どうしても解けぬのである。

(傍点・小田島)

庄兵衛は疑問に囚われる。喜助は世間的な意味での善悪の枠組みを逸脱しているのだが、庄兵衛はその枠組みの中で物事を捉えようとする、極めて一般的な庶民であつた。

このとき、庄兵衛は本人が意識する以上に極めて重要な地点に立っていた、

と言ふべきであらう。

なぜなら、庄兵衛は、この世には法によつて裁ききれないものがあることに気づき始めているからである。法そのものは本来矛盾を抱えている。世の中には、法によつて裁ききれない悪というものが確かに存在する。人々は、しばしばこれを人道上の罪と称する。一方、法がある以上、それによつて裁かざるを得ない罪というものもある。人々はそこに、しばしば同情の涙をぬぐうこともあるだろう。いずれにせよ、法は決して全能のものではない。庄兵衛が発見した地平とは、そのようなものである。疑問を抱くということは、すなわち新しい地平に立つことを意味していた。

法はあくまでも便宜的なものである。この世に多くの人々が存在する以上、事件や争い事は避けて通れない。裁く者が必要となるのはこのためである。

しかし、裁くとはそもそも白黒をはつきりさせるといふことだ。それが裁判の宿命である。だが、こと人事に関する限り、世の中は実に灰色の部分が多い。

庄兵衛は、喜助に下された弟殺しという裁きに納得しがたいものを感じる。しかし、庄兵衛の抱いた疑問は、それ以上の展開を見せない。そこに庄兵衛の限界もあつた。

庄兵衛の心の中には、いろいろに考へて見た末に、自分より上のものの判断に任す外ないと云ふ念、オオトリテエに従ふ外ないと云ふ念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、其儘自分の判断にしようと思つたのである。さうは思つても、庄兵衛はまだどこやらに腑に落ちぬものが残つてゐるので、なんだかお奉行様に聞いて見たくてならなかつた。

ここで登場してくる「オオトリテエ」とは、英語の「オーソリティー」(權威)に当たるフランス語であり、もちろん寛政の時代に同心を勤めていた庄兵衛には知る由もない言葉である。この言葉が使用されているということは、この語り手そのものがこのフランス語を理解する近代人であることを意味している。しかし、この語り手はなぜわざわざ「オオトリテエ」といふ言葉をここで使う必要があつたのか。そのような疑問が湧いてくる。

確かに、語り手はここで庄兵衛の限界を浮き彫りにした。庄兵衛はいったん

すべき答えを見出せたのだろうか。答えは否である。喜助は自分が弟殺しの罪人となるに至った事件について語るが、それを語るに際して、「跡で思つて見ますと、どうしてあんな事が出来たかと、自分ながら不思議でなりません。全く夢中でいたしたのでございます。」(傍点・小田島)と言わざるを得なかった。つまり、庄兵衛の「不思議」は新たに喜助の「不思議」を導き出すことになったのである。事実の真相を当事者に問い質そうとする行為は、志賀直哉の「范の犯罪」でも明らかのように、必ずしも明確な説明を得られるという保証はない。

ただ、一つ確かなのは、喜助本人にとっても「不思議」としか言いようのない行為が弟の目に促されていたという事実である。むしろ自害を凶りながらも死にきれず、苦悶のなかで物を十分言えなかつた弟が、兄である喜助に対して目で訴えることしかできなかつたというのが真相だろう。一方の喜助も、弟の訴えをその目の動きからうかがうしかなかつた。喜助がさかんにこのときの弟の目について言及する所以がここにある。喜助の態度が弟の目によってどのように促されていったのか、それを次の表にまとめてみた。

喜助の態度	弟の目
<p>「どうしたどうした」と言う ←</p> <p>弟の傍へ寄ろうとする ←</p> <p>思案がつかず弟の顔を見る ←</p> <p>「お医者を呼んでくるから」と言う ←</p> <p>途方に暮れて弟の顔を見る ←</p> <p>「しかたがない、抜いて遣るぞ」 ←</p> <p>弟の喉から刺刀を抜く ←</p>	<p>兄を見る…物が言えない ←</p> <p>目で兄が寄るのを留めるようにして口を利く ←</p> <p>じつと兄の顔を見詰める ←</p> <p>怨めしそうな目付き ←</p> <p>弟の目が「早くしろ、早くしろ」と言つて、さも怨めしうに兄を見る ←</p> <p>弟の目は恐ろしい催促をやめない ←</p> <p>敵の顔を睨むような、憎々しい目 ←</p> <p>目の色がからりと変わる ←</p> <p>晴れやか、嬉しそう ←</p> <p>弟の死…目を半分あいたまま ←</p>

弟の目が次第に険しくなり、それが喜助には「恐ろしい催促」「憎々しい目」へと変わっていったことが分かる。この時点で弟はもう殆ど言葉が発せられない状況に陥っていた。もはや死から逃れられないなかで、弟は必死に目で兄に訴えたのである。

ここで注目されるのは、耐えきれなくなった喜助がとうとう、「しかたがない、抜いて遣るぞ」と言ったとき、弟の目がそれまでと打って変わり、「晴やかに、さも嬉しそうに」変わったという事実である。今でも喜助の険に残っているのは、このときの弟の目ではなかつたか。これは明らかに、庄兵衛を「不思議」がらせた、喜助の晴やかな表情にも受け継がれていると考えられるからである。

田中実実は、もともとこの兄弟が余人の分け入ることのできない、密着した人間関係にあったことに注目し、喜助が弟の死によって逆に弟の心を自分の内に甦らせたのだと指摘し、それと同質のものを『山椒大夫』(大3)における安寿と厨子王との関係に見出した。確かに安寿は自分が犠牲となって弟の厨子王を逃がそうと決意したとき、「毫光のさすやうな喜」を額にたたえ、大きな目を輝かしていた。非常に示唆に富んだ発言と言えよう。

ただ、ここで確認しておきたいのは、弟が晴れやかで嬉しそうな表情を浮べて死んでいったこと、その姿が今でも喜助の中で確かな形で生き続けているというのは、あくまでも純粹に喜助兄弟の心の中で演じられたドラマであつて、ここには他者の介入する余地はないということである。『高瀬舟』では、庄兵衛の内面で演じられたドラマと、喜助兄弟の心の中で演じられたドラマがあり、それらは互いに別個のものとしてある。

喜助は、「わたくしは刺刀を抜く時、手早く抜かう、真直に抜かうと云ふだけの用心はいたしました。どうも抜いた時の手応は、今まで切れてゐなかつた所を切つたやうに思はれました。」と述べているが、この事実の真相は喜助にとって大きな問題ではなかつた。彼にとっては弟を苦悶から解放してあげることこそが大切なのであつて、自分が弟の自殺を幫助したのか、それとも弟を殺害したのかは、結果論にしかすぎないのである。

しかし、本人にとってはどちらでもいいことを認められない存在がいた。それが彼を裁く側、すなわちお上である。裁く側からすれば、裁くに足るだけの

三

この作品は喜助の直接話法による語りが多く挿入されているものの、大枠としては庄兵衛を視点人物とした叙述によって構成されている。したがって、「不思議なのは喜助の欲のないこと、足りることを知つてゐることである。」とか、「人はどこまで往つて踏み止まることが出来るものやら分らない。それを今日の前で踏み止まつて見せてくれるのが此喜助だ」という人物評は、あくまでも庄兵衛の判断による。

庄兵衛がこのような感想を抱いたのは、喜助が遠島という刑罰や二百文の鳥目を有難く受け止めていることに驚きを感じたがためである。

しかし、喜助の側は、自分が「足りることを知つてゐる」とか、「踏み止まつて見せて」いる、などという意識は毛頭ない。庄兵衛の喜助に対する驚異の念は、彼が自分の生活感覚に照らして喜助を眺めているからであり、喜助の発言を喜助の次元において捉えることができないという限界を抱えていたからである。

世間一般の人々から見れば、罪を犯して島へ流されるといふのは不幸な、憐れむべき事柄に違いない。しかし、京都で「これまでわたくしのいたして参つたやうな苦みは、どこへ参つてもなからう」と言い切る喜助にとって、島での生活は決して最悪のものとはならない。これは、京都という土地を「結構な土地」と捉える一般庶民と、そうは捉えられない喜助との差違が明瞭な形で浮き彫りになっている、ということだ。京都で最大の苦しみを経験したという思いがある喜助にしてみれば、島での生活は苦しみの軽減に他ならない。しかし、一般の庶民は違う。彼らにとつて島での生活そのものが想像を絶した苦しみであり、島へ流されるということ自体が、それまでの日常生活を奪われてしまふことに他ならないからである。この場合、彼らにはその日常生活そのものが「幸福な生活」として信じられている。しかし、それは果たしてそれほど自明なことなのであろうか。

二百文の鳥目についても、一般庶民である庄兵衛からすれば、これはさして有難がるほどの額ではないのかもしれない。しかし、それまで貧窮に喘いでいた喜助にしてみれば、手元に金が残るといふこと自体が恵みであった。

庄兵衛は一般庶民の感覚で喜助の話を聞いている。その点で、庄兵衛の眼

に喜助が欲のない人間に見えたことは、ある面で無理もなかった。その結果、庄兵衛は喜助の頭から毫光がさすように思うのだが、毫光を見出したのはあくまでも庄兵衛の側であつて、喜助ではない。これは言つてみれば、喜助の話を契機として純粹に庄兵衛の内面で展開されたドラマなのである。喜助にとつて当たりまえの事柄が庄兵衛というフィルターを通して増幅されたのであるが、その際注目すべきなのは、その増幅が庄兵衛の反省によって促されていることだ。

確かに、庄兵衛の側には喜助に対する過大評価があつた。しかし、喜助を理想化してしまう庄兵衛を一笑に付すというのも本質を見誤りかねない。なぜなら、庄兵衛は喜助を通して、自分を含め人間には欲というものがあり、これは止まる所を知らない、ということに悟るに至つたからである。

庄兵衛が喜助との間に感じた「大いなる懸隔」とは、まさにこのことだ。喜助だつて環境が変われば庄兵衛と同じ程度の欲を抱くだろうし、それがいつたん満たされれば更なる欲が湧いてくるだろう。しかし、庄兵衛は喜助を欲のない人間と思ひ込むことによつて、その対極にあるわが身、更に言えば人間一般の本質に思い至ることができたのである。踏み止まることの必要性を痛感することは、日々の生活に追われていた庄兵衛にとつては啓示的な意味を持ちえた。

四

喜助に毫光を見出した庄兵衛は、思わず彼に「喜助さん」と呼びかける。喜助から具体的な話を聞く前には、「喜助。お前何を思つてゐるのか。」と尋ねていたことを思い合わせるならば、その差違は明瞭である。このとき、庄兵衛にとつて目の前にいる人物は「罪人」という枠組みを逸脱し、まさに一人の人間として現れている。

もともと、庄兵衛が喜助に話しかけたきつかけは「不思議」の念だつた。庄兵衛が今まで目にしてきた罪人は皆、「目も当てられぬ気の毒な様子」をしてきたにもかかわらず、この喜助は「遊山船にでも乗つたやうな顔」をしていて。その違和感が、庄兵衛に「不思議」の念を抱かせたのである。

しかし、「不思議」の念を解消すべく発せられた庄兵衛の問いかけは、満足

う小説を作り上げたのだが、後の論者たちがこの主題の分裂を指摘する場合でも、あるいは統一的主题を模索する場合でも、いずれにせよ鷗外の提示した「二つの大きな問題」という枠組みから逃れられなかった事実を裏書きしていることになる。確かに鷗外は、『高瀬舟』を執筆するに際して、「流人の話」を下敷きにした。しかし、『高瀬舟』Ⅱ「流人の話」ということにはならない。まず我々は、鷗外が「流人の話」ならぬ『高瀬舟』にいかなる獨創性を加えようとしたのかを、見極める必要がある。

二

「流人の話」そのものは原稿用紙にして二枚程度の短いものである。ここでも、ある流人の様子を見て「卑賤の者ながらよく覚悟せり」と「感心」した「守護の同心」が出てくる。この同心の「称嘆」ぶりに続き、当の流人が語った内容がこのあと叙述されていくのだが、そのあらまはほぼ『高瀬舟』と重なる。そして、その結末はこのように締め括られている。

(略) 其所行もとも悪心なく、下愚の者の弁へなき仕業なる事、吟味の
上にて、明白なりしま、死罪一等を宥められし物なりとぞ、彼守護の同心
の物語なり、

(傍点・小田島)

流人の行為を「下愚の者の弁へなき仕業」と断定しているあたりに、この語り手の一種見下ろした視線をうかがうことは可能である。しかし、それは何も語り手一人に限ったことではなく、「下愚の者の弁へなき仕業」であることが「死罪一等を宥められ」るうえでの大きな一因になっていることからしても、これが共通の認識であったと類推することは許されよう。「流人の話」における「守護の同心」は流人から話を導き出す役割を確かに担った。しかし、彼はあくまでもその位置に止まっている。そのことを踏まえた場合、『高瀬舟』ではこの同心に羽田庄兵衛という固有名詞が与えられたばかりか、罪人喜助の話を聞くうちに我が身を照らし合わせ、更には深い昏迷の淵に沈んでいく彼の姿を浮き彫りにしたのは、明らかに鷗外の獨創であった。

罪人喜助の、事件の経緯についての語りが具体的かつ詳細になっているのもちろんのことだが、この作品においてこの喜助以上に同心庄兵衛の存在が強くクローズアップされていることは注目に値する。私がこの論文のタイトルを「疑問の行方」とするのは、まさにこのためである。

高瀬舟にたまたま同舟することになった喜助(罪人)と庄兵衛(同心)との会話で構成されるこの作品だが、作品の後半はほぼ喜助の直接話法で事件のあらましが語られるという特徴がある。しかし、この喜助の語りは庄兵衛によって導かれた。庄兵衛がよき聴き手であったからこそ、喜助のこのような語りが可能になったのである。

ところで、なぜ庄兵衛は良き聴き手になりえたのか。これには幾つかの理由が考えられる。

第一に、彼は相手の話を自分と照らし合わせる。喜助の抱えた問題を特殊なものとして排除するのではなく、むしろ受容しようとする姿勢があった。

第二は第一とも関連するが、庄兵衛は「喜助Ⅱ罪人」という見方に固執しなかった。あらかじめ彼は喜助が弟殺しの罪人だとだけ聞かされていたものの、その視点で眺めようとすると、「其額は晴やかで目には微かながやきがある」という喜助の表情が解せない。その結果、彼は先入観に捉われることなく、自分の感覚に従ったのであった。

そして第三は、庄兵衛が聴き役に徹し、余計な嘴を挟まなかったことである。作品には描かれていないが、喜助が語っている間、庄兵衛はそれを全面的に受け入れる態度を体全体で示していたに違いない。そのことが喜助のいわば一人語りを保証したのである。

ただし、ここで喜助と庄兵衛との間で本当の意味での対話は成立していたのであるうか、と問うことは許されよう。なぜなら、喜助の一人語りは「好く條理が立つて」おり、語り手が推測するように、喜助はこの半年間で何度も同じことを問われ、答えていく繰り返しの中で、いわば機械的に語っている面がないわけではないからである。

ただ、ここで大切なのは、たとえ喜助がほぼ機械的に語っていたにせよ、それによって明らかに心を動かされていく庄兵衛がいたということだ。

疑問の行方

— 森 鷗外 『高瀬舟』 論 —

Where the question will go to?

— A study of Mori Ogai "Takase-bune" —

* 小田島本有

Motomari ODAJIMA

—

漱石が東京帝国大学と第一高等学校の職を辞し、東京朝日新聞社に入社したのは一九〇七年(明治四十年)四月のことである。「入社①の辞」での、「新聞屋が商売ならば、大学屋も商買マウである。(略)新聞が下卑た商売であれば大学も下卑た商売である。」との言葉はいかにも爽快だ。しかし、この決断を下すまでには漱石自身の逡巡があり、執拗なまでに手当や身分の保証問題をはじめとして、かなり詳細な懸案事項について確認を怠らなかつた彼が一方でいたことを忘れるわけにはいかないだろう。

むしろ、四十代の後半を迎えた私にとって親近感を覚えるのは鷗外の方である。陸軍軍医総監、陸軍省医務局長を歴任するなど、官僚としてのトップにまで昇りつめたという華々しい経歴。周囲から見ればまさに羨望的の言ってもよい存在であった。

しかし、彼は遺言の中で、「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス(略)墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス」と述べた。彼は死に際して、それまで彼に冠されていたあらゆる肩書きを削ぎ落としたのである。そこには、山崎正和が言うところの「鬪う家長」としての宿命に忠実に生きてきた男の、人生最後の場面における究極の拒絶があった。権力の中枢にいながら、その組織の空

しさを一番よく知り抜いていたのが鷗外ではなかつたか。昇進を重ねてトップへ昇りつめていくということは、自分の意のままに組織を操れるようになることを必ずしも意味しない。むしろ自分もその組織という得体の知れないものの中に搦め取られ、「動かす」自分ではなく、「動かされる」自分を見出している。その皮肉を捉え得たからこそ、鷗外の文学は今も命脈を保ち続けているとも言える。

鷗外が陸軍の現役を退いたのは一九一六年(大正五年)四月のこと。この年は鷗外に大きな影響を及ぼしていた母峰子も亡くなっており、彼にとつては非常に大きな意味があった。この年の一月、つまり彼が退官をする直前に発表されたのが短編『高瀬舟』である。

『高瀬舟』は高校の教科書でもしばしば取り上げられる定番教材であり、よく知られた作品である。また、この作品には作者の自作注解とも言うべき「高瀬舟縁起②」という小文があり、それが読者の読みをある程度縛る結果になったのは否めない事実だろう。

鷗外はこの中で、池辺いけべ義象よしかた校訂の「翁草」に収録された「流人の話」を紹介しつつ、ここには「財産と云ふものの観念」と「死に掛かつてゐて死なれずに苦んでゐる人を、死なせて遣ると云ふ事」の「二つの大きな問題」が含まれていると述べた。鷗外はこの「流人の話」に脚色を加えることで『高瀬舟』とい